

秋瑾自筆「滬上有感」のことども

麗 澤 生

明治38年（1905）初秋のとある一日、東京赤坂区檜町の実践女学校分教場の舎監室で、舎監の坂寄美都子（後、せつ子と改名）は、しきりに事務をとっていた。その傍で、秋瑾は編み物をしながら、時折何か呟く様に何かを吟じている。不図、興味を覚えた坂寄舎監は、机上の野紙を取つて、それに書かせた。それが、この「滬上有感」で、署名はないが秋瑾の自筆、用紙は当時実践女学校で用いていたものという。

秋瑾が実践女学校に入学したのは、明治38年9月のことである。この数年前、清国女学生が一人入学したのがきっかけで、翌35年には数名の学生が入学を希望してきた。その中には、後年外交総長や財政総長などの要職を歴任した曹汝霖の妹で、曾沢霖夫人となつた曹汝錦もいた。実践女学校は、未だ創設後日も浅かつたが、附属校として女子工芸学校を併設していたから、麴町元園町（現在千代田区）の校舎は早くも手狭となり、常盤松町に移る計画もあつて、とても外国の留学生を受け容れる余裕はなかつたが、校長下田歌子の英断で、入学を許可した。この折の学生は、明治37年7月に卒業した。当時の入学生は、父兄に伴われて来日した者が多く、途中で退学する者もあつたから、この折卒業したのは二名であつた。ところが、同年11月、清国湖南省から官費留学生を送りたいという希望があり、最初は12名、後更に7名の学生を預ることとなつたので、新に「清国留学生教科規程」を作つて文部省の認可を受け、正式に「支那部速成師範科」を発足させた。就学年限は一年、一般の師範教育の他に工芸師範科の教育（裁縫・編み物・刺繍など）も併せ行つたから、かなり詰め込み

主義であつた。檜町の分教場は二階建、七室ほどある洋館を借りたもので、階上は寄宿舎、階下に舎監室・応接間・教室・食堂・台所があつた。

坂寄は、かねて上京して勉学したい旨を下田に相談していたが、「ともかく実践女学校に在籍しては」との薦めで、明治37年早春上京したが、一年も経たぬ裡に留学生部の監督兼舎監を仰付つて、以後数年間、留学生と寝食を共にすることとなつた。

下田は、若い頃外祖父東条琴基に就いて漢籍を学んだから、清国の女子留学生教育には殊に熱心であつた。又、明治30年頃、上原勇作（後の元帥）に頼まれて、逸見勇彦の面倒を見たことがあつた。逸見は、西南の役で西郷麾下の四天王と謳われた逸見十郎太の長子で、父の歿後生活が荒み、奔放不羈な性格も手伝つて手に負えない代物になつていた。下田も困つたが、試みに華語を学ばせると驚く程早く長足の進歩を見せた。この時、下田も一緒に華語を学んだ。先生は東京専門学校（現在の早稲田大学）に学んで、清国大使館に勤めていた戦翼輩。坂寄も、留学生を預る様になつてから、少しばかりこの人に華語を習つたことがある。間もなく戦氏は上海に作新社を設立する為帰国したので、それなりになつた。

秋瑾は、気象の激しい女性で、容易に自説を枉げて他に譲ることがなかつた。例の「留学生取締規則」の問題で帰国してしまつたから、実践女学校に在籍したのは僅か数ヶ月に過ぎなかつたけれど、印象は強く残つている。帰国する際、形見として『白香詞譜』（この本は、実践女子大学に現蔵）を呉れましたが、その頃から革命に殉ずる気持ちはあつたらしい。「同盟会」などにも関係していたことは坂寄も薄々知っていたが、特別に質したことはないという。清国留学生の記録や写真はずい分沢山あつたが、戦災ですつかり焼いてしまつた。北京の服部繁子（宇之吉博士夫人）から下田校長充に、清国留学生教育のことを喜んだ手紙もあつたが、焼けてしまつた。

（注） 以上は、昭和37年11月、坂寄女史が小笠流礼法講習会の講師として、樞原神宮に見えられた折拝聴した話を、当時のノートに基いてまとめたものである。

（りたくせい）